

## 「ヴェローナの貴婦人」(アナトール・フランス)

イタリヤはサンタ・クロッチェ修道院の古記録の中に、ある僧院長が次の様な記録を遺してゐた。

十四世紀初頭、ヴェローナの町のエレッタ夫人は比類無く美しく、容姿が優れてゐたので、「ジュピター神のつくられたもの」に違ひないと噂する僧侶がゐる一方、かくまでの「肉の美」は「神の敵たる悪魔」のなせる業かも知れぬと考へる僧侶もゐた。何しろ彼女は「エロスの神」さながらの容貌で、「五體は、好色男子のよろこびをなすに、ひとつとして缺けるところ」無く、衣装の上からもその「美しさ、見事さは十分外にうかがはれた」から、彼女が寺院で跪ひざまうくとか石床に額をつけてひれ伏すとか、一々身動きをする度に、眺める男どもは彼女を「ひとと抱きしめたい情欲に驅られ」ずにはゐなかつた。

十五歳の時、彼女はある辯護士に嫁いだ。裕福で評判も好かつたが、何せ老人で甚だ不ぶざま様に

肥つてをり、ヴェローナ第一の美女がそんな「むざんな男とひとつ寝してゐるといふのは、思ふも痛ましい」次第だつたから、思慮ある人達も、若妻が仕事で夜更しする夫の目を盗んで「美貌の伊達男たちを夜な夜なわが寢所へ迎へる様を、驚きといふよりはむしろ悲痛の氣持」で眺めてゐた。

だが、實はその夜な夜な、彼女が快樂を得てゐたのは相手の男達からではなく、己れ自身からなのであつた。即ち彼女が愛したのは「己れであつて、その情人ではなかつた」。彼女は只管ひたすら己れ自身のみを愛し、そのみを「肉欲や望みや悅樂」の對象としたのであつて、その點、世間一般の女の情欲が他人への愛著と結附いてゐるのに比べると、「肉の罪」が「限らない深さに達して」をり、「はるかに神から隔てられて」ゐたと云はねばならぬ。

二十歳の時、夫人は重病に罹かかり、死期の近きを知ると、己が美しき肉體を「見るもいたましい」程に愛惜し、贅澤な衣裝で飾つて我胸、我腰を撫でさすり、「この世の名残りになほも己れの魅力を楽しし」み、かくも「愛した肉體が濕つた地下で蟲けらに食はれ」たくないとして、臨終の時、「いとしい惡魔よ、わたしのからだも魂もとつておくれ」と叫んで死んだ。葬られた翌朝、夫人の上に投げかけた土は掘り返され、棺の扉は開かれ中は空になつてゐた。

二十世紀フランスの大家アナトール・フランスの作品だが、彼は晩年、かう語つたといふ。「人間といふすばらしい矛盾の織物——もしも苦惱によつて高められ、苦惱によつて贖あがなはれるのでなければ、嗤わらふべきものであるだらうこの人間といふ動物——に驚くこと。數々の情念を通じてそのむなしさを語り、またその甘美な幻想を語ることに。さうして、未來をも見分けるすべを學ばんがために過去を想ふこと。——これが私の仕事でした」(大塚幸男譯)。「苦惱によつて高められ、苦惱によつて贖はれる」事が無ければ「人間といふ動物」は何處迄「嗤ふべき」存在に墮し得るか、夫人の「驚く」べき一生がそれを如實に物語つてゐる譯だが、「肉の罪」故に限らず、人間が「苦惱によつて高められ、贖はれる」存在である事に洋の東西、時の古今の別は無い。即ち眞摯な道德的煩悶あつて初めて人間は全う足り得るのだが、それを自覺する爲にも、フランスの云ふ様に、「過去を想ふ」事は頗る重要である。彼は歴史に深く分入り、殊にギリシャ・ラテンの古典を徹底的に研究し、過去を鑑として「未來を見分けるすべを學ばうとした。然るに今や我國では「不正漢字・不正假名遣」が當然視されて古典との距離は益々廣がり、古人を鑑として今人を知り未來を見分ける手立は失はれる一方である。

(生島遼一譯、「アナトール・フランス小説集」八、白水社)